

# 愛知用水と不老会

用水建設に命をかけた久野庄太郎とその仲間たち

浜島辰雄 編著

不老会創立四十周年記念事業推進委員会





愛知用水の主要水源——牧尾ダム（下流側から望む）



愛知用水取水口（岐阜県可見郡八百津町）。左手が兼山取水口、右手がダム



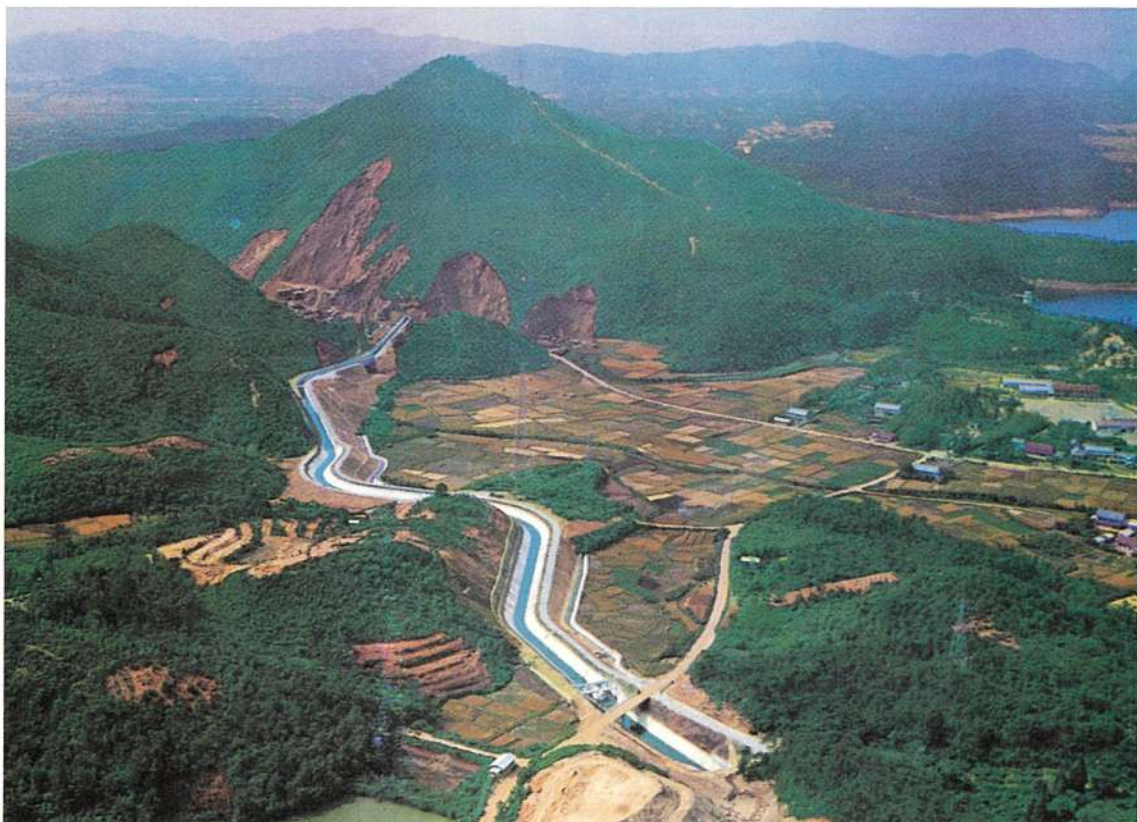
王滝村と牧尾ダムを上流から望む。前方にかすんで見えるのがダムの堰堤。尾張東部・知多半島に水を引くために、ダムの底に家が沈み、村を離れねばならなかった犠牲者が沢山いたことを忘れてはならない



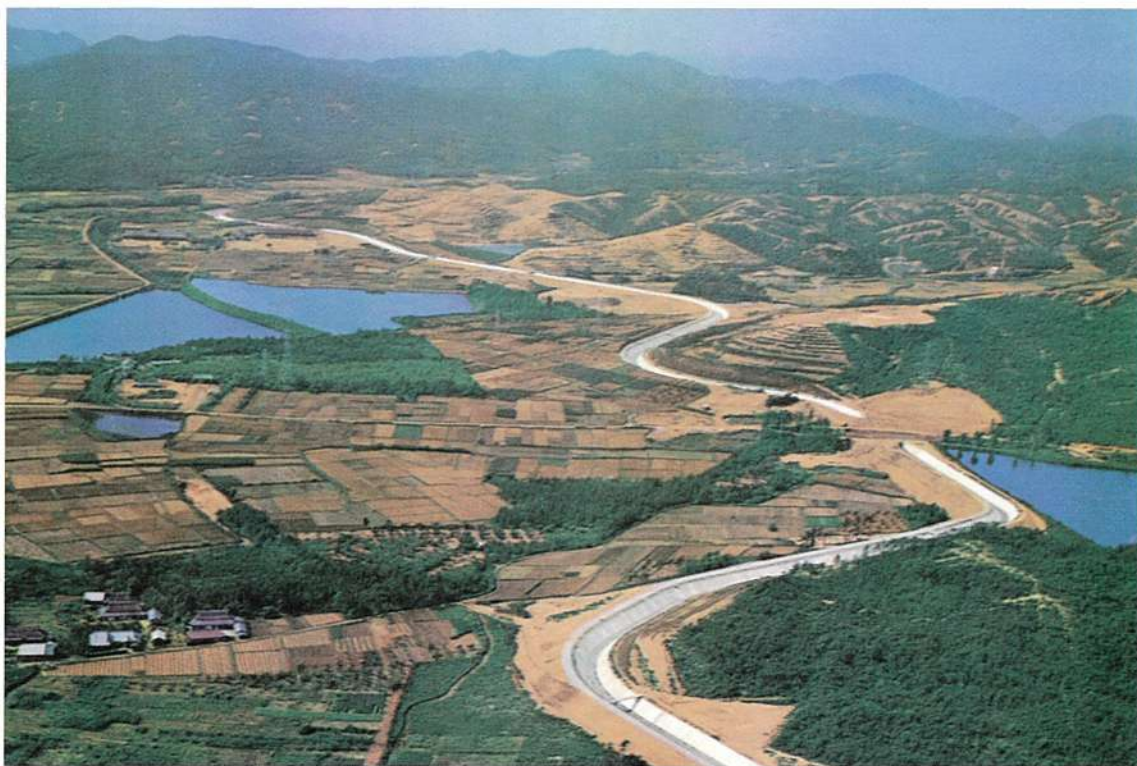
牧尾ダム工事現場（昭和33年）



着工前の牧尾ダムサイト——手前の釣橋は牧尾橋、多くの農家がダムの底に沈んだ  
(朝日新聞社提供)



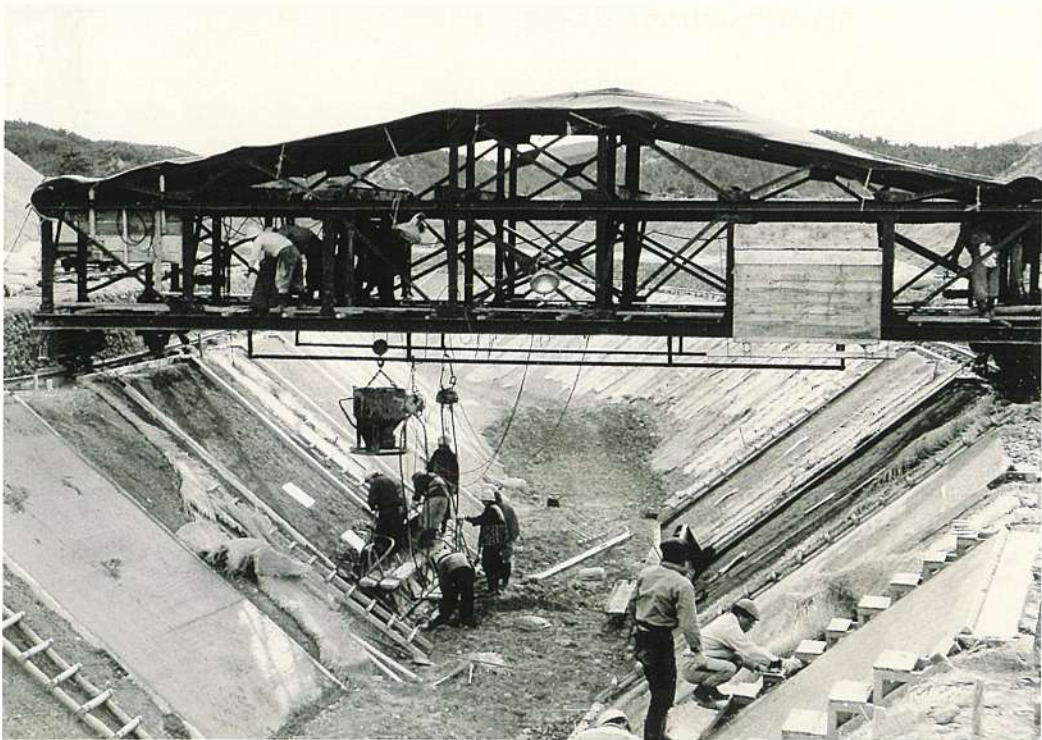
幹線水路の一部。白山トンネル入口から入鹿水路橋を望む



用水幹線の一部——城東開水路（犬山市塔野地地内）



高蔵寺サイフォン(全長648メートル)と高蔵寺水路橋。トンネルを出て庄内川を鋼管橋で渡り、名古屋市守山区志段味の第1トンネルに入る



城東開水路の建設作業——幅12.2m、底幅3.2m、水路3.2m、毎秒30m<sup>3</sup>の水を通す



三好池（旧曲り池、西加茂郡三好町地内）ダム全景



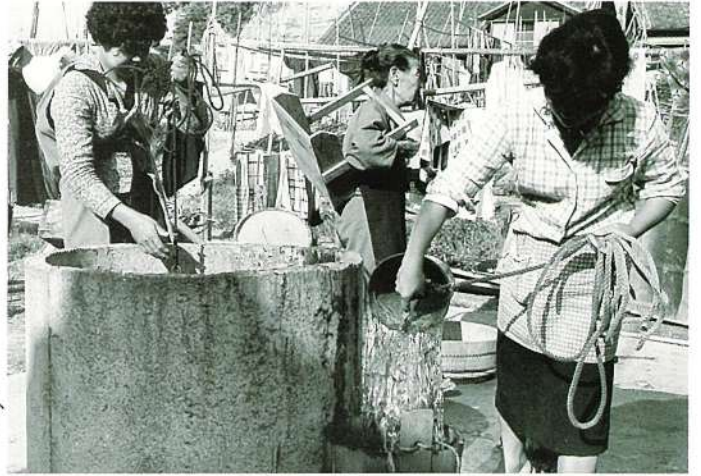
工事中の三好池ダムと取水塔



幹線から上水道用水を取り入れる上野浄水場



幹線の終点。内福時ポンプ場



愛知用水が引かれる（36年6月）以前、南知多町師崎の町には共同井戸が一つしかなかった



共同井戸から飲料水を汲んで桶をにない運ぶ主婦

師崎港。幹線水路の終点に近いこの海岸の町は永年飲料水に苦しんできた。用水が引けるまでは浜井戸がこの町でただ一つの飲料水源であった。いまは、水道が引けている





三好高地のスプリンクラー。荒れ果てた盆地の頂上付近も用水の水がスプリンクラーによって運ばれ、見事な西瓜畑となった



秋の大府付近。高地のため、旱魃のたびに悩まされていたが、用水の通水により毎年稔りも豊かである。稲の穫入れにいそしむ



水の心配もなく、玉ねぎやじゃがいもの収穫で大忙しの初夏の知多半島(横須賀)の農家



佐布里（そうり）ダム—このダムは愛知用水の水を工業用水として使用する重要な水源地ダムである



佐布里ダムの工事。農民の負担金を少しでも軽くしようと、臨海部にコンビナートの誘致を考え佐布里ダムを作ることによって、用水の水を環流させ工業用水として役立たせた



佐布里浄水場—愛知用水から送られきた水はこの水槽に入れられ、浄化して工業用水となり臨海工業地帯へ送水管を通して送られている



佐布里ダムより名古屋南部工業地帯に水を送る工業用送水管。完工当時はこんなのかな光景も見られたが、今では危険地区ということで、“通行禁止”になっているだろう



佐布里ダムの調整ゲート。流れる水量を自動的に記録する



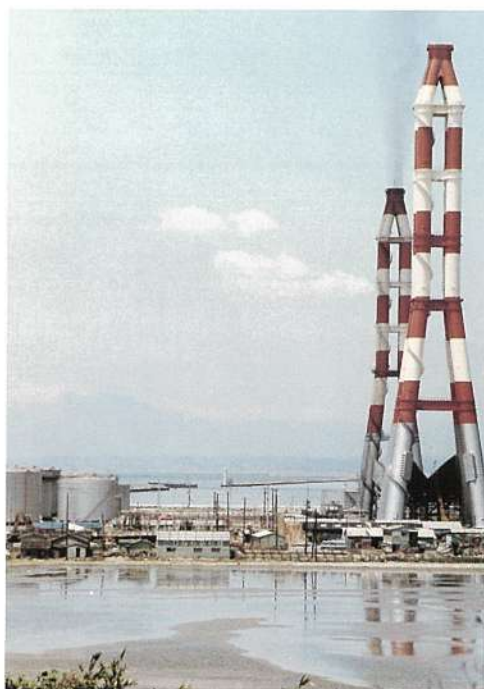
佐布里池を見下ろす丘のじゃがいも畑にも、愛知用水の水はコックーフで通水している。むかしの同志と畑の様子をみる久野庄太郎さん（左）



南方上空より見た名古屋南部臨海工業地帯。昭和50年頃（名港管理組合提供）



出光興産知多製油所



中部電力知多火力発電所



献体の塔——名古屋市千種区の西北画16,000㎡の土地に昭和60年4月11日に竣工



竣工式のあと、記念植樹をされる  
高松宮夫妻



竣工式で碑文の除幕をする久野庄太郎さん  
(白幕の端を握る)

献体の塔は石材探しから始まった。やっと良質の石材が額田の山で見つかった



工事もすべり出し好調



石材の切り出しも始まる



玄室天井型枠  
(玉の下)工事



5大学献体の塔建設工事現場視察団（名大、名古屋市大、保健衛生大、愛知医大、愛知学院大）の先生方と不老会メンバー



最頂部に近い部分の石積み



「球」8段の積石完成!

「球体」の出現!



献体の塔（玄室）の見事な天井



上空から見た献体の塔

愛知用水と不老会

——用水建設に命をかけた久野庄太郎とその仲間たち

## 本書の刊行によせて

不老会創立四十周年記念事業推進委員会 委員長 竹内 弘

時は、暮れも迫った十二月二十五日。

こちらは、知多の農民陳情団十六名。

受けているのは、吉田内閣総理大臣、佐藤官房長官。

間には、幅一間（一・八メートル）強、長さ二間（三・六メートル）強の大地図、題して「愛知用水概要図」。

知多半島に水がほしい、安定的な営農がしたい、の一念で陳情にまでこぎつけた。

昭和二十三年の当時、敗戦の虚脱からようやく目覚めた人々が戦後復興に地域再建に動き出し、数えきれない陳情団が東京へと押し寄せていた。

その中であって、知多の農民は、県知事にも国会議員にも頼まず、わが地域を復興再建するには、自分達の力で地域の経済力を高めるべきで、それを実践するための計画であり地図であった。

吉田内閣総理大臣は、地図に描かれた用水路の青い線を日本再生の光明の一すじと見ておられたのかもしれない。

もともと、この地方は物造りの盛んな地域である。遠くは「せともの」が陶磁器の代名詞になるほどの窯業があり、美濃の和紙は「美濃版」として全国の紙の規格となり、西洋の規格にも相通ずるといふ。地域限定ではあるが「有松絞」「知多木綿」の名産品を生み、自動織機の発明は日本の産業革命を呼び起こし、戦前は航空機産業のメッカであった。その技術は自動車産業に受け継がれてきた。工場が立地し、人が集まれば、欠かせないものが水の供給である。

当初、農業用水として計画されたものが、水道用水・工業用水へと用途を拡げ、遂には総合水利用水に変貌しつつ、新しい農を生み、都市を育て、臨海工業コンビナートを立地させ、夢想だにしなかった献体団体不老会をも生み出してしまいました。しかし、それは平坦な道ではなかった。先人の深い思慮と命がけの奔走、多くの人の協力があって、愛知用水建設事業は内外に面目をほどこしました。

不老会創立四十周年にちなみ、これら幾多の足跡をしるすことといたしました。目にしていただいた方々に、郷土の一層の進展のよすがにしていただければ望外の幸せと存じます。

平成十七年三月

## まえがき

編著者 浜島辰雄

愛知用水のことに關しては、すでに愛知県と愛知用水公園で発行した『愛知用水史』（本編、資料編）があり、平成十四年には愛知用水土地改良区が『愛知用水土地改良区五十年の歩み』を發行し、その経緯、経過については、各種報道機関や諸雑誌で報道されています。特に平成十四年五月にはNHKの『プロジェクトX』で全国に報道され、私はそのつど、編纂に参画したり、資料について協力してきましたが、編纂の主旨、紙数の関係で、私達が当初にいただいていた意図や理想を充分表現できなかった憾がありました。とくに久野庄太郎さんを中心とした地域の同志の人達の協力、久野さん自身の辛酸の機微に類する部分については、充分表現することができなかつたと思っています。

私は愛知用水完成後、毎年近傍の小中学校から社会科の教科課程の一端として講話の依頼を受け、事情の許す限り出向いて、用水以前の農家の早魃との闘い、農民生活の実態、私の幼少時代からの農家生活、水番の話など、久野さんの幼少時代のことを交えて話をし、敗戦後の農民生活、地域開発の意義など、社会科の「地域を拓く」主旨に合わせて話してきました。

今、新世紀を迎え、多くの当時の同志は黄泉の客となり、残された一人として、当時の真実の姿の一端でも残しておきたいと禿筆を顧みず筆を取った次第であります。

当初は私の個人出版のつもりでいましたところ、計らずも、愛知用水に引き継いで発生した命の会、財団法人不老会の創立四十周年の記念誌として発行するという光榮に浴し、内容も急遽改めて、その意に沿うよう改編して出版することになりました。

そのため当時の人々のプライバシーに関することは、できるだけ軽くタッチすることに留め、野人性の表現は改めたつもりであります。それでも、各所にその片鱗の残っていることはお許し頂きたいと思えます。

あの終戦の地獄の中から立ち上がった男を中心に、その仲間達が、どのように動き、どのように働き、人々を感動させ、今日の姿を創り上げる源をつくったかを描きたかったことを心に置いて御読み頂き、新しい世紀の道しるべとして頂ければ、望外の幸せと致します。

どうかこの物語の中に込められた観自在、施無畏、人類愛の発露のような仲間たちの心を汲んで頂いて後の世のしるべになればこれに優るものではありません。

平成十七年一月十日記す